

否定文の分析にむけての覚え書

上山, あゆみ
九州大学大学院人文科学研究院文学部門

<https://doi.org/10.15017/1463253>

出版情報：文學研究. 111, pp.69-88, 2014-03-18. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：



九州大学大学院人文科学研究院
『文学研究』第111輯抜刷
2014年3月発行

否定文の分析にむけての覚え書

上 山 あゆみ

否定文の分析にむけての覚え書

上 山 あゆみ

1. 統語論の課題

従来の統語論においては、しばしば、提示された単語列によって、その単語列が文法的であるかどうかが決まっているという前提のもとで、その対応関係が正しく再現できるようなモデルを作ることが課題とされてきた。その上で、その対応関係の正確さ・扱える提示文の多さ・モデルの簡潔さなどが、その評価の観点となっていたと考えてよい。

しかし、どの単語列を「文法的」と判断してよいか、現実的には必ずしも自明ではない。個人差という問題もあるが、特に日本語の場合、一見不自然に見えても、たいていの文は、いろいろ文脈を補えば、最終的には何らかの解釈が可能になる場合がほとんどである。では、統語論のモデルは、いっさいの解釈が不可能な単語列とそれ以外とが区別できればいいのだろうか。それでは、おそらく統語論のモデルは単に形態論における決まりを述べただけのものになってしまうだろう。

実は、単語列によっては、「絶対に不可能な解釈」をはっきりと同定することができることが示されてきた¹。文の容認可能性については、一般的に個人差が大きいものであるにもかかわらず、特定の「不可能な解釈」については、目立って頑健 (robust) な調査結果が得られるのである。したがって、提示された単語列によって、可能な意味解釈と不可能な意味解釈の集合が決まっているという前提のもとで、その対応関係が正しく再現できるようなモデルを作ることを目指すならば、十分に意味のある課題を設定することがで

1 この結論を支持する論文は数多くあるが、特にこの観点から述べられているのは、Hoji 2003, Hoji 2010 である。

きる。

多くの場合、研究者の興味を引いてきたのは、「特に努力をせずとも解釈できる文」と「解釈不可能ではないにせよ、相当、特殊な文脈を想像しなければならない文」との違いであった。しかし、前者を「文法的」、後者を「非文法的」とみなすわけにはいかない。これは度合の違いであり、どこかに線を引いて、「文法的」「非文法的」と分断できるようなものではないからである。「絶対に不可能な解釈」以外の解釈の容認可能性については、個人差が大きいが、それらはすべて「文法的な解釈」とみなすべきである。「文法的な解釈」も様々ありうるので、それらがすべて生成されるように狙って規則をつくろうとしても、きりが無い。むしろ、あらゆる可能性に対応できるようなシステムにしておいて、「不可能な意味解釈」が出ないよう工夫をしていくべきである。つまり、統語論というものは、単語の集合が持ちうる意味解釈の集合に制限を与えるものであるという考え方ということになる。

2. 統語意味論のモデル

チョムスキーは、語彙項目の集合から併合 (Merge) という操作により統語構造が形成され、PF・LF の二つの出力のうちの PF が音韻論的に解釈されて調音・知覚機構に送られ、LF が意味論的に解釈されて概念・意図機構に送られるという統語論のモデルを提唱した。そのモデルにおいて、様々な統語論の知見が明らかにされてきたと考えているので、基本的には、生成文法のモデルを踏襲したいと考えているが、生成文法においては、LF から読み取られる「意味解釈」および、言語が伝えている（と私たちが思っている）「意味」との関連については明示的な言及がない。「提示された単語列によって、可能な意味解釈と不可能な意味解釈の集合が決まっているという前提のもとで、その対応関係が正しく再現できるようなモデルを作る」ことを課題とするためには、意味表示についての具体的なモデルが不可欠である。以下では、生成文法のモデルを意味表示に結びつけるところまで拡張したモデルを便宜的に**統語意味論**と呼ぶことにする。

2.1. 統語意味論における意味表示

まず、オブジェクトを (1) のように定義し、意味表示というものはオブジェクトの集合であると定義する。

(1) オブジェクト

$$\langle \mathbf{xn}, \{ \langle \mathit{attribute1}, \mathit{value1} \rangle, \langle \mathit{attribute2}, \mathit{value2} \rangle, \dots \} \rangle$$

attribute (項目名) と value (値) のペアによって、1 つの特性が記述され、(1) の第 1 項である **オブジェクト id** と特性集合 (attribute と value のペアの集合) とのペアがオブジェクトである²。ここで、オブジェクトとは、いわゆる個体だけでなく、デキゴトや、モノのグループ、また不可算の物質など、私たちが「アレ／ソレ／コレ」で指しうるあらゆるものを含むとする。たとえば (2) は、オブジェクトの一例である。

- (2) a. $\langle \mathbf{x19}, \{ \langle \mathit{type}, \text{モノ} \rangle, \langle \mathit{name}, \text{ジョン} \rangle, \langle \mathit{性別}, \text{男} \rangle, \langle \mathit{kind}, \text{大学生} \rangle, \langle \mathit{年齢}, 20 \rangle, \dots \} \rangle$
- b. $\langle \mathbf{x65}, \{ \langle \mathit{type}, \text{デキゴト} \rangle, \langle \mathit{name}, \text{北京オリンピック} \rangle, \langle \mathit{kind}, \text{スポーツ大会} \rangle, \langle \mathit{開催年}, 2008 \text{年} \rangle, \dots \} \rangle$
- c. $\langle \mathbf{x923}, \{ \langle \mathit{type}, \text{デキゴト} \rangle, \langle \mathit{name}, \text{〇〇海岸OL殺人事件} \rangle, \langle \mathit{犯人}, \mathbf{x65} \rangle, \langle \mathit{被害者}, \mathbf{x24} \rangle, \langle \mathit{担当主任刑事}, \mathbf{x337} \rangle, \dots \} \rangle$
- d. $\langle \mathbf{x82}, \{ \langle \mathit{type}, \text{デキゴト} \rangle, \langle \mathit{kind}, \text{落とす} \rangle, \langle \mathit{落下物}, \mathbf{x53} \rangle, \langle \mathit{行為者}, \mathbf{x19} \rangle, \dots \} \rangle$

2.2. 統語意味論の文理解のモデルと課題へのアプローチ

「提示された単語列によって、可能な意味解釈と不可能な意味解釈の集合

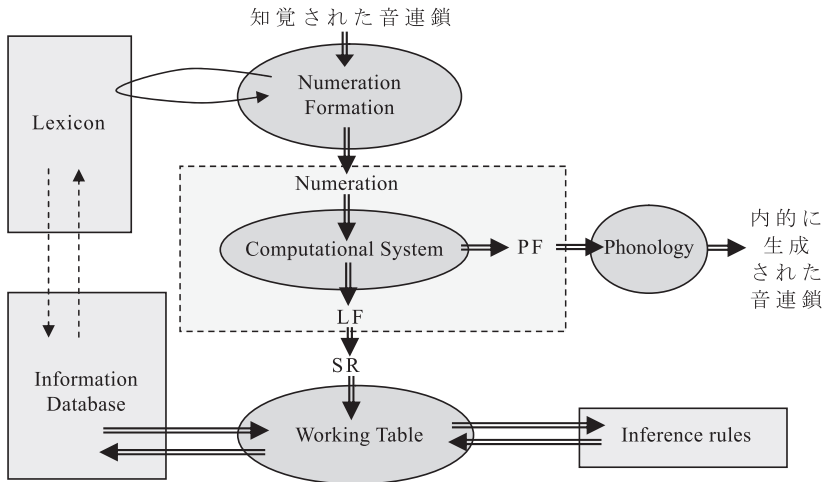
2 (1) が成り立っていれば、次の式も成り立つものとする。

$$\begin{aligned} \mathit{attribute1}(\mathbf{xn}) &= \mathit{value1} \\ \mathit{attribute2}(\mathbf{xn}) &= \mathit{value2} \end{aligned}$$

否定文の分析にむけての覚え書

が決まっているという前提のもとで、その対応関係が正しく再現できるようなモデルを作る」という課題に取り組むためには、単語列の提示から意味表示の出力までのモデルが必要である。統語意味論におけるモジュール構成は次のとおりである。

(3) 文理解の流れ



(3) の中央の破線の四角の部分は、いわゆる生成文法で想定されているとおりである。統語論 (Computational System) の出力である LF は、単語の集合に構造関係を加えた表示であるが、それを意味表示構築のための指令群に置換したものが SR で、SR に基づいて、作業的な意味表示 Working Table が作られる。Working Table は、そのまま私たちの理解する「意味」を表している場合もあれば、さらに推論規則 (inference rules) を働かせたり、背景的な世界知識 (Information Database) から補ったりしなければならない場合もある。つまり、私たちが理解する「意味」とは、(i) Lexicon において指定されている各語彙項目ごとの部分意味表示に、(ii) 構造関係から読み取られる意味表示構築情報が加えられ、必要に応じて (iii) 世界知識を援用し、

推論により適宜情報を補ったもの、なのである。

従来、意味論の研究においては、モンタギュー意味論を基礎とする形式意味論が最も広く利用されているが、これは、統語論の探求には非常に使いにくい。単語が持つ「意味」がいわば「このような構造的な位置に現れれば、最終的にこのような真理条件を表すことになるもの」という形式をとっており、「単語の意味」の中に構造的な情報と文全体の意味とが取り込まれてしまっているがために、少しでも「用法」が違えば別の「単語の意味」を仮定する必要があり、結果的に、統語論が意味解釈に与えているはずの制限がすべて「単語の意味」の中に埋没してしまうからである。それに対して、統語意味論においては、語彙項目自体が持つ意味情報と、構造関係が持つ意味情報を区別することによって、結果的に、もっともすっきりした形で LF から意味表示を出す関数を定義することを目指している。

2.3. 統語意味論の現状

統語意味論は、これまでの統語論の成果を受け継ぐものではあるが、理論全体としては誕生もないため、まだ、基盤を整備している段階である。現時点では、まず、典型的な語彙語（名詞、動詞、形容詞等）の意味表示への変換方法のタイプ分けをし、構造関係が持つ意味情報を割り当てたところである。語彙語の主要な意味タイプは (4), (5), (6) の3つであり、併合 (Merge) によって形成される構造関係は (7), (8), (9), (10) の4種類が区別されている。

(4) S(elect)型：

いわゆる指示的 (referential) 表現。

動詞のほとんどと名詞の多くが含まれる。

意味表示に新たなオブジェクトを追加する働きを持つ。

(5) U (pdate) 型 :

いわゆる修飾語、記述的 (descriptive) 表現。

典型的には形容詞や形容動詞であるが、名詞や動詞もある。

意味表示に既に含まれているオブジェクトの特性集合に特性 (attribute と value のペア) を追加する働きを持つ。

(6) L (ink) 型 :

いわゆる関係名詞 (相対名詞)。

S 型の働き (= 意味表示に新たなオブジェクトを追加する) と U 型の働き (= 既存のオブジェクトの特性集合に特性を追加する) の両方を持つ。その結果、2つのオブジェクトの間に関係性を生じさせる。

(7) 構造関係から読み取られる意味表示構築情報 タイプ1 :



主要部 β が S 型 / L 型であり、 a が U 型の場合

→ a が対応する特性は、 β が指示するオブジェクトの特性集合に追加される。

(8) 構造関係から読み取られる意味表示構築情報 タイプ2 :

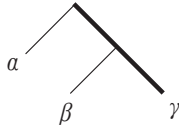


主要部 β が S 型 / L 型であり、 a も S 型 / L 型の場合

→ a が指示するオブジェクト \mathbf{x}_n と、 β が指示するオブジェクト \mathbf{x}_m との間に関連性を成立させる推論規則 (Relate \mathbf{x}_n to \mathbf{x}_m)

が発動される³。

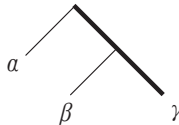
- (9) 構造関係から読み取られる意味表示構築情報 タイプ3：



主要部 γ が S 型 / L 型ではなく、 β が U 型の場合

→ a が指示するオブジェクト \mathbf{xn} の特性集合に、 β が対応する特性が追加される。

- (10) 構造関係から読み取られる意味表示構築情報 タイプ4：



主要部 γ が S 型 / L 型でなく、 β が S 型 / L 型の場合

→ a が指示するオブジェクト \mathbf{xn} と、 β が指示するオブジェクト \mathbf{xm} との間に関連性を成立させる推論規則 (Relate \mathbf{xn} to \mathbf{xm}) が発動される。

これに対して、助詞や助動詞などの機能語については、まだ基本的な格助詞ぐらいいしか考察が進んでいないため、今後、1つ1つ検討していかなければ

3 この規則は、「 \mathbf{xn} and \mathbf{xm} are related.」という状態が確認されれば、そのまま次の処理に進み、そうでなければ、データベースに情報を加えて「 \mathbf{xn} and \mathbf{xm} are related.」という状態を作り出せ、というコマンドである。「 \mathbf{xn} and \mathbf{xm} are related.」が成り立つのは、次のいずれかの条件が満たされる場合である。

- (i) $\mathbf{xn}=\mathbf{xm}$
- (ii) $attribute(\mathbf{xn})=\mathbf{xm}$
- (iii) $attribute1(\mathbf{xy})=\mathbf{xn}$ and $attribute2(\mathbf{xy})=\mathbf{xm}$
- (iv) \mathbf{xn} and \mathbf{xy} are related, and \mathbf{xm} and \mathbf{xy} are related

ばならない。本論文では、その中でも特に大きな課題である否定辞ナイについて、その分析の方向性を述べておく。

3. 否定文

3.1. 否定にまつわる問題点

統語意味論に限らず、意味表示をオブジェクトの集合としてとらえるアプローチの場合、常に、否定文をどう扱うかということが問題になる。たとえば、(11a) のような肯定文ならば、その意味表示は (11b) でかまわないだろうが、同じように (12a) のような否定文を分析すると、意味表示は (12b) のようになりかねない。

- (11) a. ジョンが来た。
b. <x1, {<type, モノ>, <kind, 人>, <name, ジョン>}>
<x2, {<type, デキゴト>, <kind, 来た>, <agent, x1>}>

- (12) a. ジョンは来なかった。
b. <x1, {<type, モノ>, <kind, 人>, <name, ジョン>}>
<x2, {<type, デキゴト>, <kind, 来なかった>, <agent, x1>}>

しかし、(12b) は、いわば、「来なかった」というデキゴトが存在する、と主張することになってしまう。オブジェクトという存在物の集合を意味表示とするアプローチだからこそ、非存在をどのように表すかということが問題になるのである。

3.2. 否定辞ナイがそのまま value の一部となる場合

ただし、(12) で問題が生じたのは、否定辞がついている要素である動詞がS型だからである。S型は、意味表示に、その語彙項目が対応するオブジェクトの存在を追加するものであるからこそ、否定辞の機能と衝突してし

まう。これに対して、否定辞がU型の語彙に接続している場合には、大きな問題はない。(13)のように、否定辞が接続した形のまま value とみなしてよいと考えている。

- (13) a. ジョンは若くない。
 b. <x1, {<type, モノ>, <kind, 人>, <name, ジョン>, <age: 若くない}>>

(13b)のように「若くない」という複合形のままで value とみなしているのは、以下のような理由による。

「若い」という表現は、*age* という観点 (スケール) のある範囲に対応している。それが具体的にどこからどの範囲であるかは、文脈によって異なるだろう。短距離走の選抜メンバーの話をしている場合と、地方自治体の選挙に立候補する場合とでは、「若い」の基準は大きく異なっている。同様に、「若くない」という表現も、*age* という観点のある範囲に対応している。そして、その範囲は必ずしも「若い」の残りのすべての部分であるとも限らない。通常、赤ん坊のことは「若い」とは言わないし、100歳のお年寄りに「若くない」という言い方をすることもめったにない。仮に、「若い」の範囲から「若くない」の範囲をつきとめる関数を定義できたとしても、同じ関数が「赤い」と「赤くない」に適用できるとは考えにくい。つまり、何らかの形容詞 *a* について、「*a* + ナイ」の値の範囲を「*a*」の値の範囲に基づいて、形式的に計算する関数を定義することは不可能である可能性がきわめて高い。むしろ、「*a*」の値の範囲を表現ごとに覚えなければならないと同様に、「*a* + ナイ」の値の範囲も 1つ1つ覚えていくものだと仮定するしかないと考えている。

3.3. S型をU型に変換する否定辞ナイ

さて、ナイの1つの用法がU型に接続して新しい value を形成することであるという考え方に基づいて、動詞に接続している場合について考える

否定文の分析にむけての覚え書

と、次の可能性が浮上する。

- (14) ナイがS型の語彙項目 a と併合 (Merge) した場合、 a をU型に変換する。

言い換えると、動詞肯定文がデキゴトの存在を述べる文であるのに対して、動詞否定文は性質を述べる陳述文になる、と言っていることになる。

動詞がU型になるとすると、動詞が表す特性は、どのオブジェクトの特性となるのだろうか。U型の語彙項目が対応する特性の行き場所を決定する構造が(7)と(9)のどちらかしかないとなると、動詞否定文の場合には、明らかに(7)は適用しないので、(9)が適用すると考えるしかない。つまり、動詞否定形による特性記述の受け入れ先となるオブジェクトは、いわゆる主述関係 (Predication) の主部 (Subject) が指示するオブジェクトということになる。

実際、否定文は、肯定文よりもずっと、ハ句がないと「座りが悪くなる」ことが知られている。

- (15) a. ジョンが来た。
b. ジョンは来なかった。
c. ?ジョンが来なかった。
d. 今日はジョンが来なかった。

(15a-d) の容認性の差は、容認可能／容認不可能というほど頑健 (robust) なものではなく、(15c) も十分に容認可能ではあるが、(15a,b,d) に比べて何かを補って考えなければならない印象がある。もし、動詞否定述語がU型であり、その特性記述の受け入れ先となるオブジェクトがハ句であると仮定するならば、(15c) では、音韻的にはハ句があらわれていないため、空範疇としてのハ句を補って文を構築しなおす必要があり、それが「座りが悪い」と

いう印象を生み出しているのではないだろうか。

3.4. U型の「動詞+ナイ」が対応する意味表示断片

では、もともとS型である動詞がU型に変換された場合、その対応する意味表示断片はどのように作られるのだろうか。

参考として、自立語としてのナイに対応する意味表示断片について考えてみる。

- (16) a. ジョンは、ひげがない。
 b. $\langle x1, \{ \langle type, \text{モノ} \rangle, \langle kind, \text{人} \rangle, \langle name, \text{ジョン} \rangle, \langle \text{ひげ}, \text{none} \rangle \} \rangle$

3.3節で動詞否定文について述べたのと同様、(16a)の文でも、「ひげがない」という表現は、「ジョン」という語彙項目が指示するオブジェクトの特性を追加する働きを持っている。どのように表示するかは難しいところだが、(16b)のように「ひげ」が項目名(attribute)に相当し、ナイでそのvalueの非存在を述べるという考え方がありうるだろう。

そうだとすると、動詞否定文である(17a)の場合も、(17b)のような意味表示に対応していると考えていいかもしれない。

- (17) a. ジョンは来なかった。
 b. $\langle x1, \{ \langle type, \text{モノ} \rangle, \langle kind, \text{人} \rangle, \langle name, \text{ジョン} \rangle, \langle x2, \text{none} \rangle \} \rangle$
 $\langle x2 \{ \langle type, \text{デキゴト} \rangle, \langle kind, \text{来た} \rangle, \langle realis, - \rangle \} \rangle$

これは、「来た」という動詞が、通常ならばS型となり、対応する意味表示断片は $\{ \langle type, \text{デキゴト} \rangle, \langle kind, \text{来た} \rangle \}$ であるのに対して、「来なかった」になると、対応する意味表示断片がいわば $\langle \text{来たこと}, \text{none} \rangle$ になり、これがジョンの特性集合の要素となるという考え方である。ただし、その実現方法としては、(17b)では、いったん $x2$ というオブジェクトを導入した上

否定文の分析にむけての覚え書

で、それを irrealis とし、そのオブジェクト id を attribute とした $\langle x_2, \text{none} \rangle$ という特性をオブジェクト x_1 の特性集合に追加した⁴。

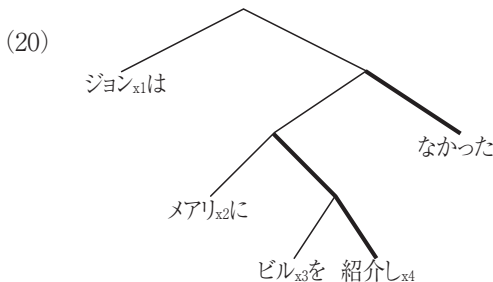
(17b) で、「来たこと」という attribute を仮定するかわりに x_2 というオブジェクトをいったん導入しているのは、次のように、問題となる attribute が複合的に形成される場合もあるからである。明らかに、(18) の文の解釈を考えた場合、「ジョン」に追加されるべき特性は、(19a) ではなく (19b) になってほしい。

(18) ジョンは、メアリにビルを紹介しなかった。

(19) a. \langle 紹介したこと, none \rangle

 b. \langle メアリにビルを紹介したこと, none \rangle

(18) の文は、ジョンが、誰かに誰かを紹介するという行為を一切しなかった、という意味であるというよりは、誰かに誰かを紹介していたかもしれないが、メアリにビルを紹介する、ということはしなかった、という意味だからである。このことは、動詞否定文の構造を概略 (20) のように考えれば、そのまま説明できる⁵。



4 以下、オブジェクト id 型 attribute という名称を用いることにする。

5 「紹介し」という動詞は、goal や theme などの項をとらなければならないという統語特性を持っているため、先に「なかった」と併合してしまうと、その統語特性が満たされなくなってしまう。

<x1, {<type, モノ>, <kind, 人>, <name, ジョン>, <x4, none>}>
 <x2, {<type, モノ>, <kind, 人>, <name, メアリ>}>
 <x3, {<type, モノ>, <kind, 人>, <name, ビル>}>
 <x4, {<type, デキゴト>, <kind, 紹介し>, <theme, x3>, <goal, x2>, <realis, ->}>

3.5. シカ～ナイ構文

ナイが義務的に生起しなければならない構文もある。たとえば、シカ～ナイ構文はその1つである。(21)のような文を見ると、一見、「来なかった」は「ジョンしか」について何かを述べているように見えるかもしれないが、(22)を見れば明らかなように、3.3節の動詞否定文と同様、シカ～ナイ構文の場合にも、全体としてハ句が指示するオブジェクトについての特性を表していると考えべきである。

- (21) ジョンしか来なかった。
 (22) 1年生は、ジョンしか来なかった。

実際、「ジョン」は「来なかった」のではなく「来た」のであるから、「来なかった」という特性がジョンというオブジェクトについてのものであるはずがない。むしろ、「来なかった」のは「ジョン以外」である。すなわち、(22)は、「1年生」というオブジェクトを「ジョン」と「ジョン以外」に分割した上で、その「ジョン以外」に対して「来なかった」という特性を追加しているものに違いない。

「ジョンしか」の意味を「ジョン以外」と同じであるとする考え方は、片岡(2006)、宮地(2007)などで主張されているものである。

- (21) ジョンしか来なかった。
 (23) a. ジョンのほか来なかった。

否定文の分析にむけての覚え書

- b. ジョンよりほか来なかった。
- c. ジョン以外、来なかった。

ただし、ここで大きな問題が生じる。「ジョンしか」の場合には、必ず「来なかった」という形式にならなければならないのに対して、「ジョン以外」の場合には、必ずしもその必要はないという違いである。

- (24) a. *ジョンしか来た。
b. ^{ok} ジョン以外は来た。

さらに、片岡 (2007) で指摘されているように、(25) のような違いもある。

- (25) a. ジョンしか来なかった。*ジョンも来なかったけどね。
b. ジョン以外は来なかった。ジョンも来なかったけどね。

「ジョンしか」の意味を基本的に「ジョン以外」と考えるならば、(24) や (25) の違いはどのように説明すればいいだろうか。

3.4 節では、「a ナイ」がオブジェクト id 型 attribute を含んだ意味表示断片に対応するという前提で説明を進めたが、シカ～ナイ構文の場合には、何らかの統語条件が満たされているために、次のような意味表示断片が作られているとしたらどうだろうか⁶。

- (26) <x1, |<type, モノ>, <kind, 1 年生>, <agent (x3), ¬ (x2 以外)>|>
<x2, |<type, モノ>, <kind, 人>, <name, ジョン>|>
<x3, |<type, デキゴト>, <kind, 来た>, <realis, ->|>

6 通常の動詞否定文のときに、具体的にどのような規則によって、オブジェクト id 型 attribute が派生するかは今後の課題としたが、Link 型 attribute が派生される仕組みについても、今後の課題とした。

この「*agent(xn)*」のような式は、L (ink) 型の語彙の特性の value として現れるものなので、以下、便宜的に、このような attribute を Link 型 attribute と呼ぶことにする。

「*agent* (来た), ¬(ジョン以外)」という特性は、読み下すと、「来た人は、「ジョン以外ではない人」だった」ということであるから、つまり、「来た人は、ジョンだった」ということになり、すると (25a) の場合、第 2 文が続くと矛盾が生じることが、正しく予測される。

これに対して、「ジョン以外は来なかった」の場合には、3.4 節と同様に (27) のような意味表示が出てくるとすると、これは単に「ジョン以外の人々」についての特性記述であるから、(25b) のように第 2 文が続いても、必然的には矛盾は生じないことになる。

- (27) <x1, {<kind, ジョン以外>, <x2, none>}>
 <x2, {<type, デキゴト>, <kind, 来た>, <realis, ->}>

(27) は、3.4 節で導入した、より一般的な動詞否定文の分析にしているのであるから、(25b) が容認可能であることは、一般的な分析の予測通りである。それに対して、(25a) が容認不可能になることは説明を要する点であり、つまり、(27) のような分析ができず、(26) にならなければならないということを導き出す必要がある。

そこで、次のように仮定してみる。

- (28) VP の修飾語句としての位置に併合している要素は、Link 型 attribute の value にしかなれない。

- (29) NP シカは、VP の修飾語句としての位置に併合されている。

この 2 つの仮定をすることによって、(25a) で必然的に矛盾が生じることだ

否定文の分析にむけての覚え書

けでなく、(24a) が容認不可能であることも説明できる。動詞にナイがつかない以上、Link 型 attribute が作られることもないからである。

(28) における「VP の修飾語句としての位置」とはどういうものか、さらに考察が必要であるが、ここで、(25a) と (25b) の違いを統語的な位置の問題であると考え、「ジョンしか」と「ジョン以外」という表現の違いであると考えなかったのは、「ジョン以外」であっても、「ジョンしか」と同じ統語的位置にあるのではないかと思われる次の例では、第 2 文によって矛盾が引き起こされるからである。

- (30) 1 年生は、ジョン以外、来なかった。*ジョンも来なかったけどね。

3.6. ダレモ～ナイ構文

否定と呼応する表現として、シカと並んでよく取り上げられるのがダレモ～ナイ構文である。

- (31) a. 誰も笑わなかった。
b. ?* 誰も笑った。

ダレモガの場合には、ナイとの共起が義務的でない。

- (32) a. 誰もが笑わなかった。
b. 誰もが笑った。

(31) の場合には、格助詞が後続していないことから、ダレモも、「VP の修飾語句としての位置」に生起する表現であるという可能性がある。実際、(33) のような構文が可能であることから、NP シカとの共通性がうかがえる。

(33) 1年生は誰も来なかった。

そこで、この場合の意味表示も、Link 型 attribute を含んでいると考え、次のように仮定すればいいのではないだろうか。

(34) <x1, {<kind, 1年生>, <agent (x2), none}>>
<x2, {<type, デキゴト>, <kind, 来た>, <realis, ->>

NP シカと同様、格助詞の後続しないダレモも VP の修飾語句としての位置に併合されていなければならないとすると、(28) により、Link 型 attribute の value にしかなれないはずである。そのために、ダレモはナイとの共起が必要となるという説明が可能になる。

3.7. 遊離数量詞構文

Link 型 attribute は、いわゆる遊離数量詞構文にも関わっている可能性がある。Mukai (2012) の分析を統語意味論の枠組みに翻訳すると、意味表示が次のようになる可能性があるからである。

(35) a. 1年生は、3人来た。
b. <x1, {<kind, 1年生>, <agent (x2), 3人}>>
<x2, {<kind, 来た>, <agent, x3}>>

遊離数量詞構文の場合には、シカ～ナイ構文やダレモ～ナイ構文よりもさらに複雑な側面がある。Link 型 attribute が形成されるだけでなく、(35b) のように、動詞の S 型としての働きも保持されているようであるからである。さらに問題となるのは、この構文の場合、ナイが共起していなくても Link 型 attribute が形成されると考える必要があるという点である。

もし、何らかの語彙項目がなければ Link 型 attribute が形成されないとい

否定文の分析にむけての覚え書

うことならば、遊離数量詞構文の場合には、Link 型 attribute を形成する空範疇が関わっていると考えざるをえない。もちろん、その空範疇の生起制限がなければ、3.5 節や 3.6 節の議論が成り立たなくなってしまうので注意が必要であるが、この仮定は、(36) の文が多義的であるという観察とは一致する。

(36) 1 年生は、3 人来なかった。

- (37) a. <x1, |<kind, 1 年生>, <来た人 3 人, none>|>
b. <x1, |<kind, 1 年生>, <来なかった人, 3 人>|>

Link 型 attribute の形成方法についての仮説が立っていないため、(37) の意味表示もわかりにくいものにしかっていないが、(36)、(37) の観察は、(38a) が (38b) の解釈しか持たないということと好対照を成している。

- (38) a. 3 人の 1 年生が来なかった。
b. <x1, |<kind, 1 年生>, <人数, 3 人>, <x2, none>|>
<x2, |<type, デキゴト>, <kind, 来た>, <realis, ->|>

3.8. metalinguistic negation としてのナイ

3.2 節では、value の一部に含まれるナイを、3.3 節～3.7 節では、S 型である動詞を U 型に変換するナイについて述べたが、そのどちらとも異なるナイもある。

- (39) a. お金がほしくて言っているのではない。
b. 早く来たのではない。早く来過ぎたのだ。

(39) のようなナイは、metalinguistic negation の一種と考えられる。これは、

統語的に sister となっているものが a ならば、その a から生まれる意味表示を Delete せよ、という指令であるとみなせばいいだろう。次の観察からも、ノデハナイのナイが Link 型 attribute を形成しないことは明らかである。

- (40) a. * ジョンしか来たのではない。
b. * 誰も来たのではない。

同様に、(36) とは異なり、(41) は「来なかったのが 3 人」という解釈は持たないのである。

- (41) 3 人来たのではない。

4. まとめ

以上、否定にまつわる問題点を概観し、分析案の方向性を提示した。もし、本論文に示した方向性が正しいのならば、次のような仮定の束で、多くの現象が同時に説明できることになる。

- (42) Link 型 attribute が作られる仕組み
(28) VP の修飾語句としての位置に併合している要素は、Link 型 attribute の value にしかなれない。
(43) オブジェクト id 型 attribute を作るナイの意味表示
(44) Link 型 attribute が作られた場合のナイの意味表示
(45) metalinguistic negation のナイの意味表示

本論文では方向性の提示しかできなかったが、今後、具体的に仮説を形成して検証を進めていきたい。

参照文献

- Hoji (2003) "Falsifiability and Repeatability in Generative Grammar: A Case Study of Anaphora and Scope Dependency in Japanese," *Lingua* 113, pp.377-446.
- Hoji (2010) "Hypothesis Testing in Generative Grammar: Evaluation of Predicted Schematic Asymmetries," *Journal of Japanese Linguistics* 26, pp. 25-52.
- Mukai, Emi (2012) *Binding and Scope Dependencies with 'Floating Quantifiers' in Japanese*, Doctoral dissertation, University of Southern California.
- 片岡喜代子 (2006) 『日本語否定文の構造：かき混ぜ構文と否定呼応表現』, くろしお出版.
- 片岡喜代子 (2007) 「現代日本語シカのふるまいと統語的条件」, 日本言語学会第 135 大会予稿集 pp. 344-349. 信州大学.
- 宮地朝子 (2007) 『日本語助詞シカに関わる構文構造史的研究』, ひつじ書房.